

生産 — 米 —

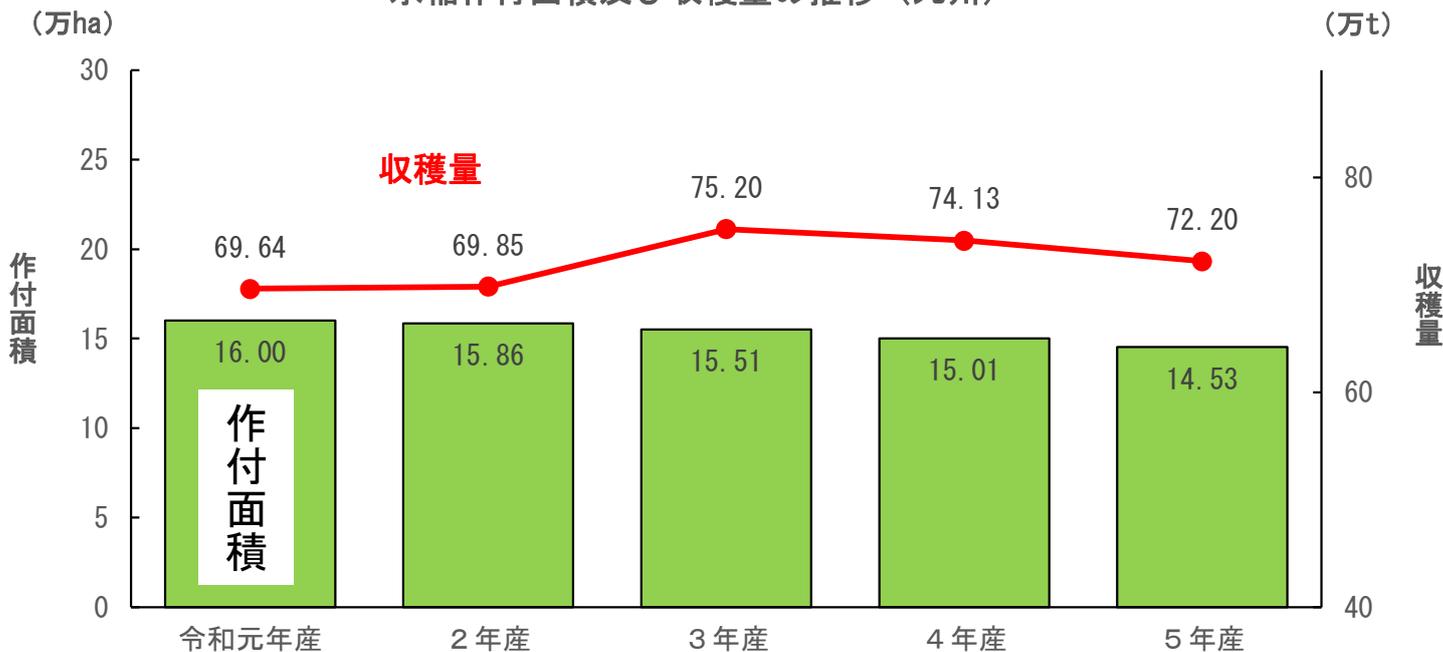
【水稲の収穫量(子実用*)は72万2,000 t (前年産に比べ19,300 t 減少)】

令和5(2023)年産水稲の九州の作付面積(子実用)は、14万5,300haで前年産に比べ4,800 ha減少しました。そのため、収穫量(子実用)は、前年産から19,300 t 減少し72万2,000 t となりました。作柄は、全もみ数がやや少ないものの、出穂期以降の天候に恵まれ登熟は良となり「平年並み」(作況指数101)となりました。

「令和5年産米の食味ランキング((一財)日本穀物検定協会)では、九州で9銘柄が最高評価の「特A」を獲得しています。

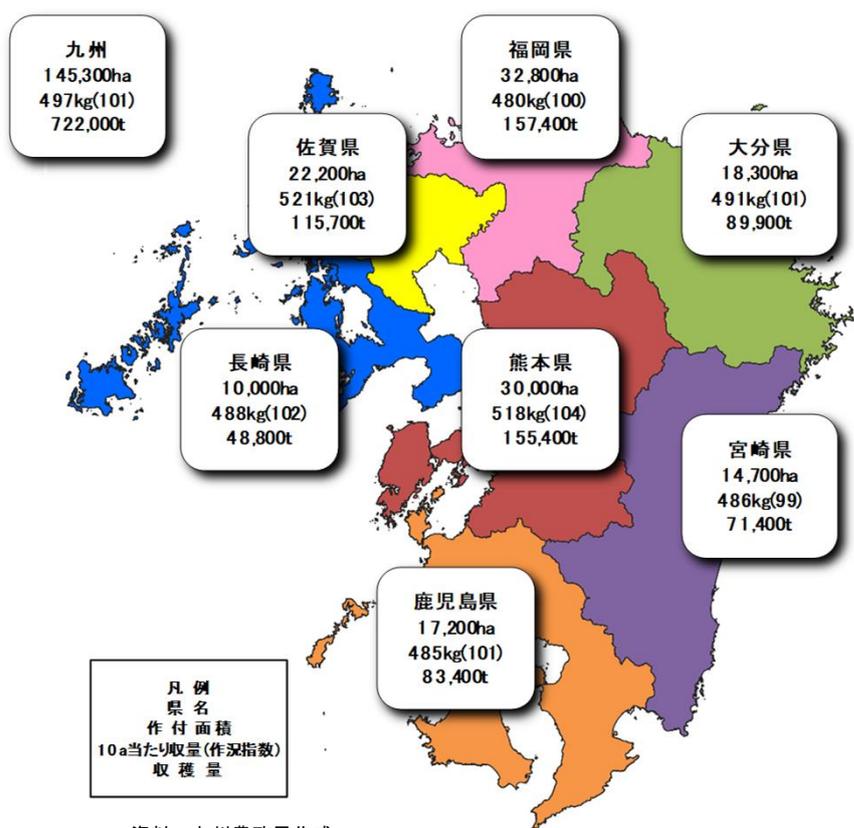
* 主に食用に供すること(子実生産)を目的とするものをいい、全体から「青刈り」を除いたものをいう。

水稲作付面積及び収穫量の推移(九州)



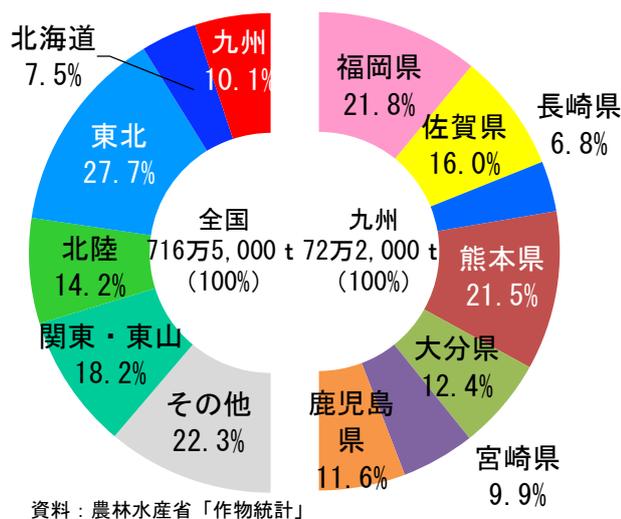
資料：農林水産省「作物統計」

県別作付面積及び収穫量



資料：九州農政局作成

令和5(2023)年産 収穫量の全国及び九州内割合



資料：農林水産省「作物統計」

令和5(2023)年産食味試験結果 (九州特A一覧)

産地	品 種 名	地 区
福岡県	元気つくし	
佐賀県	さがびより	
	夢しずく	
長崎県	にこまる	
熊本県	森のくまさん	県北
	ヒノヒカリ	豊肥
大分県	ひとめぼれ	西部
	つや姫	
鹿児島県	あきほなみ	県北

資料：(一財)日本穀物検定協会

生産 — 麦類・大豆 —

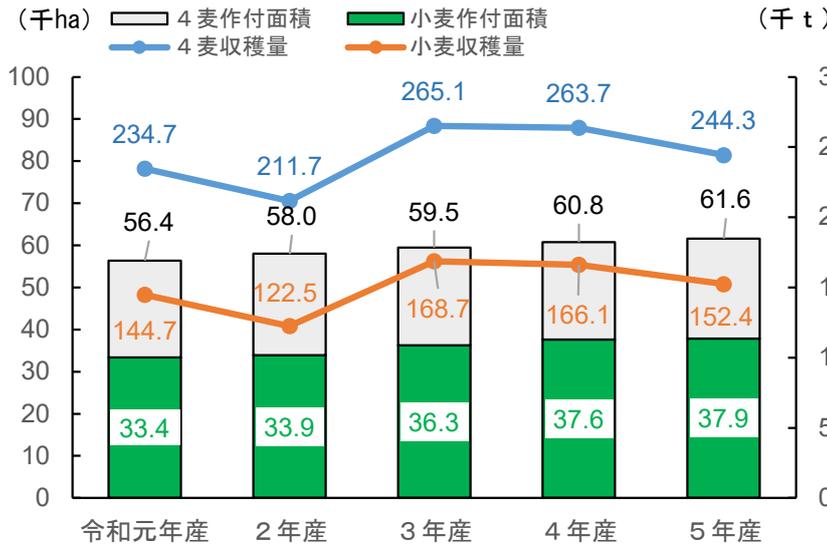
【4麦の収穫量は、前年産に比べ19,400 t 減少】

令和5(2023)年産4麦計(子実用*) (小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦)の作付面積は6万1,600haで前年産に比べ800ha増加、収穫量は24万4,300 tで、前年産に比べ1万9,400 t減少しました。九州の全国に占める割合は18.4%となっており、福岡、佐賀、熊本で約9割を生産しています。

4麦の中で最も多い小麦の作付面積は、3万7,900haで前年産に比べ300ha増加し、収穫量は15万2,400 tで前年産に比べ1万3,700 t減少しました。

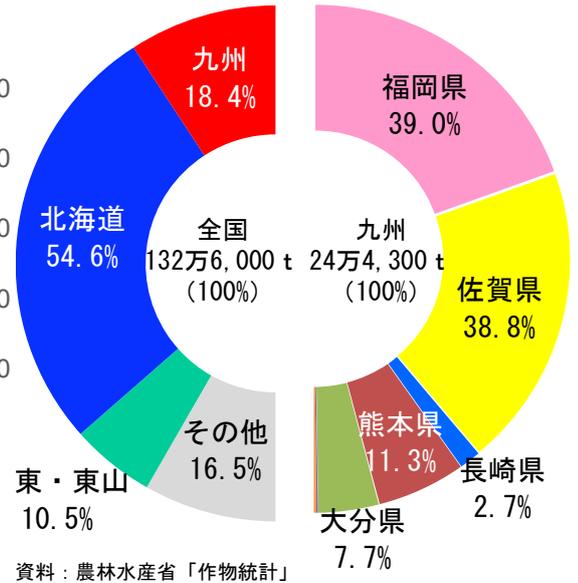
* 主に食用にすること(子実生産)を目的とするものをいう。

作付面積及び収穫量の推移(九州)



資料：農林水産省「作物統計」

令和5(2023)年産 収穫量の全国及び九州内割合



資料：農林水産省「作物統計」

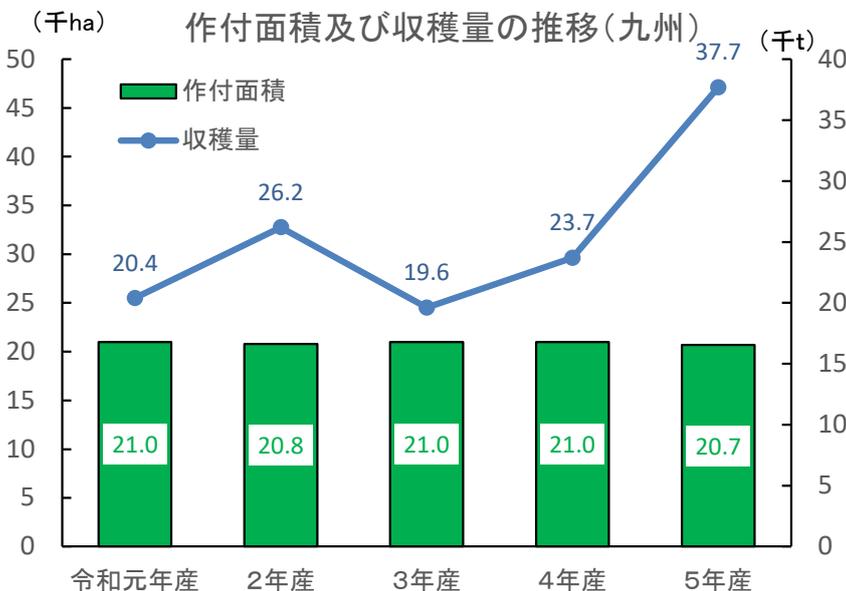
【大豆の収穫量は、前年産に比べ1万4,000 t 増加】

令和5(2023)年産大豆(乾燥子実*)の作付面積は2万700haで前年産から300ha減少しました。収穫量は3万7,700 tで生育期間がおおむね天候に恵まれ、着さや数が多くなり前年産に比べ1万4,000 t増加しました。

九州の全国に占める割合は約15%となっており、福岡、佐賀、熊本で約9割を生産しています。

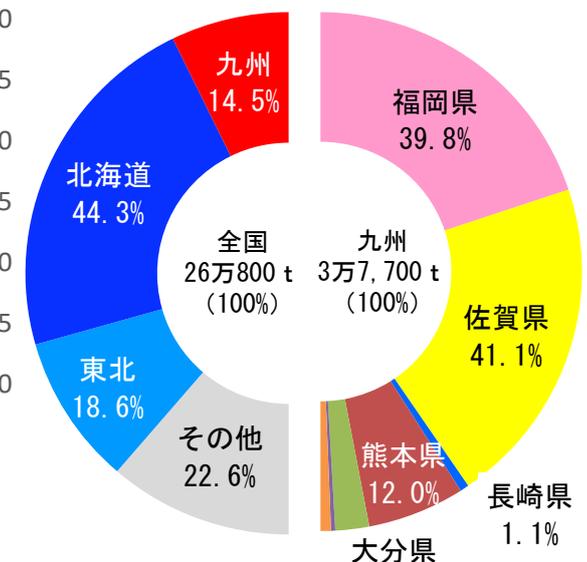
* 食用を目的に未成熟(完熟期以前)で収穫されるもの(えだまめ)を除いたものをいう。

作付面積及び収穫量の推移(九州)



資料：農林水産省「作物統計」

令和5(2023)年産 収穫量の全国及び九州内割合



資料：農林水産省「作物統計」

生産 — 野菜 —

【九州は重要な野菜供給基地】

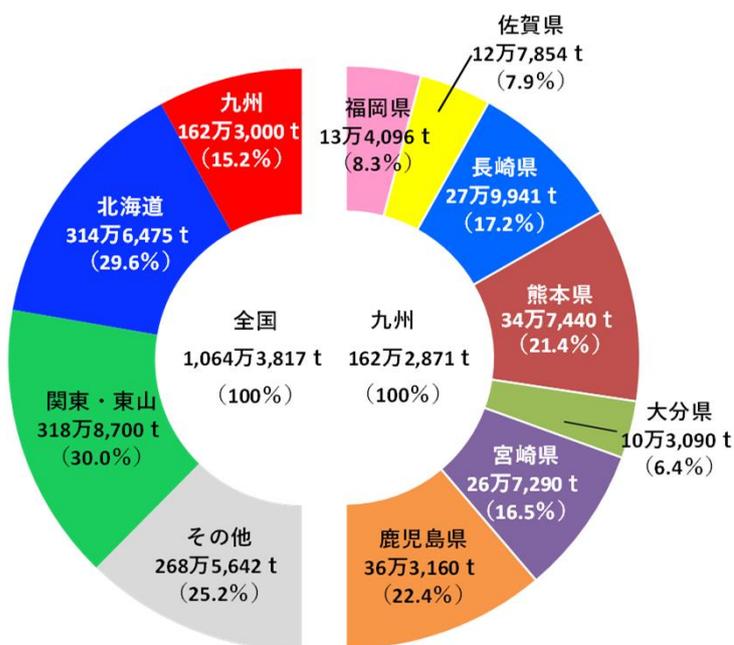
九州では、温暖な気候を生かした野菜の栽培が盛んです。令和4(2022)年産の九州における指定野菜(14品目*)の収穫量は、ピーマン、トマト等の施設野菜やさといも、だいこん等の露地野菜を中心に全国の15.2%、野菜の産出額では全国の19.3%を占めています。九州の産出額に占める野菜の割合は23.6%で、畜産の49.3%に次ぐ重要な品目となっています。

産出額で全国に占める割合が高い品目は、ピーマン(36.4%、宮崎県全国2位、鹿児島県全国4位)、ばれいしょ(27.0%、鹿児島県全国2位、長崎県全国3位)、トマト(25.0%、熊本県全国1位)、なす(23.4%、熊本県全国2位、福岡県全国4位)の順となっています。

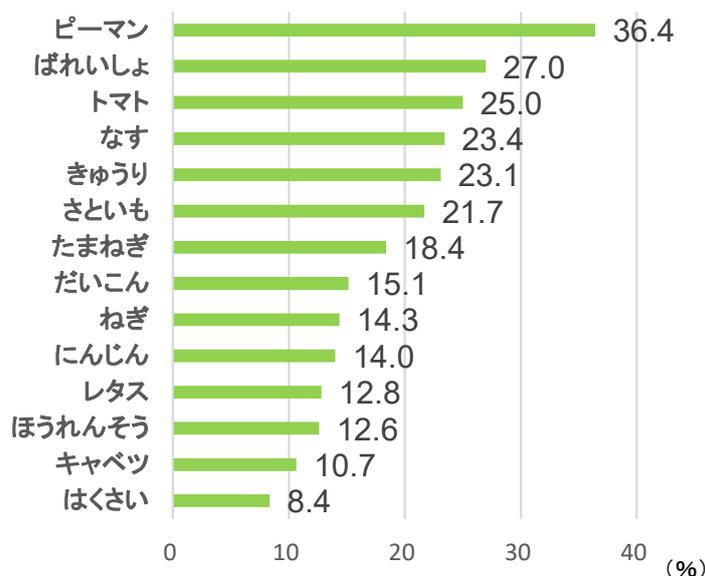
指定野菜以外では、いちご(34.6%、福岡県全国2位、熊本県全国3位、長崎県全国4位)、かんしょ(27.9%、鹿児島県全国3位、宮崎県全国5位)、すいか(22.5%、熊本県全国1位)などです。

* 指定野菜とは、野菜のうち特に消費量の多いもの(下右のグラフの14品目)

令和4(2022)年
指定野菜収穫量の全国及び九州内割合



令和4(2022)年
九州の指定野菜産出額の全国シェア



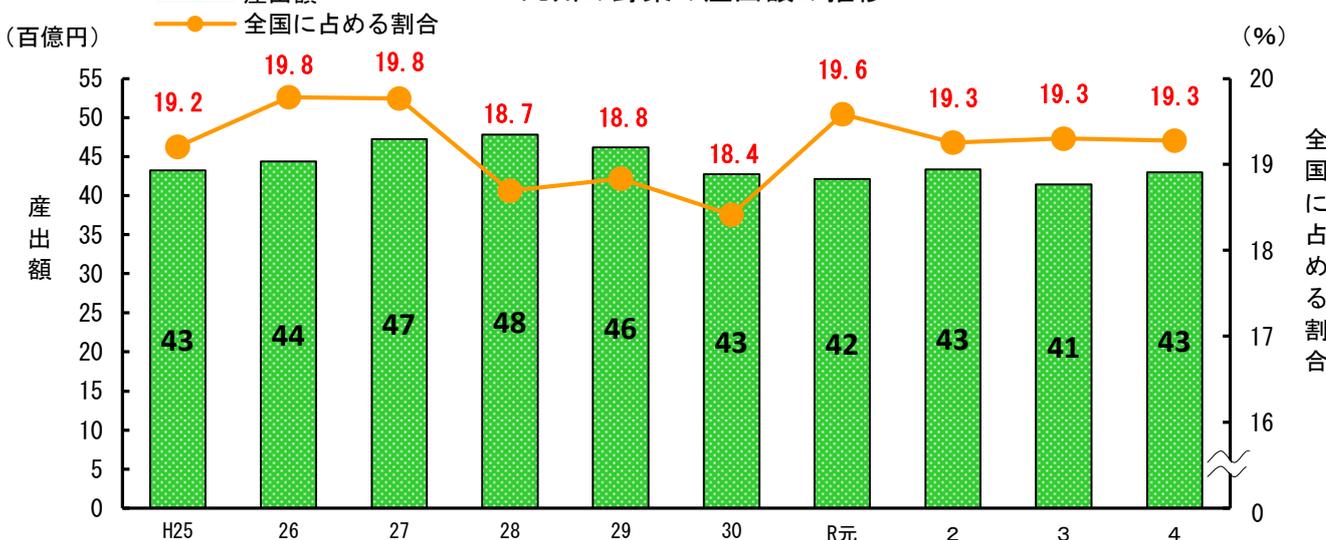
資料：農林水産省「野菜生産出荷統計」

注：野菜生産出荷統計結果を基に九州農政局において指定野菜を集計した値

ラウンドにより計と内訳が一致しない場合がある

資料：農林水産省「生産農業所得統計」

九州の野菜の産出額の推移



資料：農林水産省「生産農業所得統計」

生産 — 果樹 —

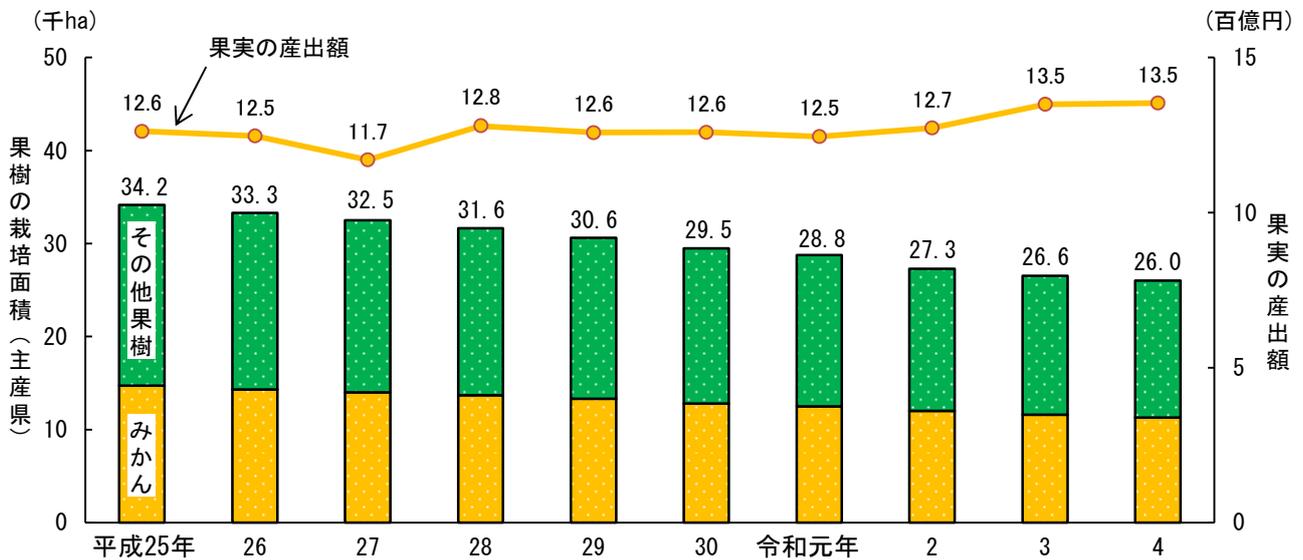
【栽培面積は減少傾向にあるものの産出額は微増】

九州における果樹の栽培面積（主産県*）は、高齢化や担い手不足による栽培農家数の減少に伴う緩やかな減少傾向にあり、令和4（2022）年は2万6,000haとなっています。一方、果実の産出額は、1,353億円とやや増加しました。この背景として需要の減少より生産量が減少していることや高品質な果実が生産されていることが考えられます。

九州が全国の収穫量の約3割を占めるみかんでは、結果樹面積が1万900haで前年産に比べ200ha（1.8%）減少したことに加え、着果数が少なかったこと等から、収穫量は19万8,400 tで前年産に比べ4万2,200 t（17.5%）減少しています。また、九州の収穫量のうち、熊本県、長崎県、佐賀県で8割近くを占めています。

その他果実の産出額は、ぶどう194億円（全国の10.1%、福岡県全国5位）、不知火（デコポン）122億円（同68.9%、熊本県同1位）、日本なし113億円（同16.5%、福岡県同7位、熊本県同8位、大分県同9位）、マンゴー63億円（同70.8%、宮崎県同1位、鹿児島県同3位、熊本県同4位）となっています。

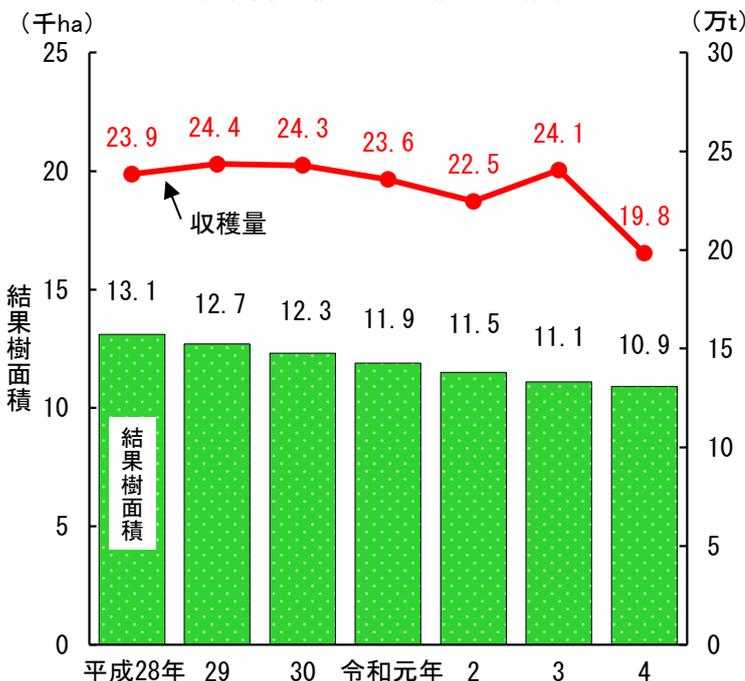
* 主産県とは、全国の栽培面積のおおむね80%を占めるまでの上位都道府県又は果樹共済事業を実施する都道府県



資料：農林水産省「生産農業所得統計」「耕地及び作付面積統計」

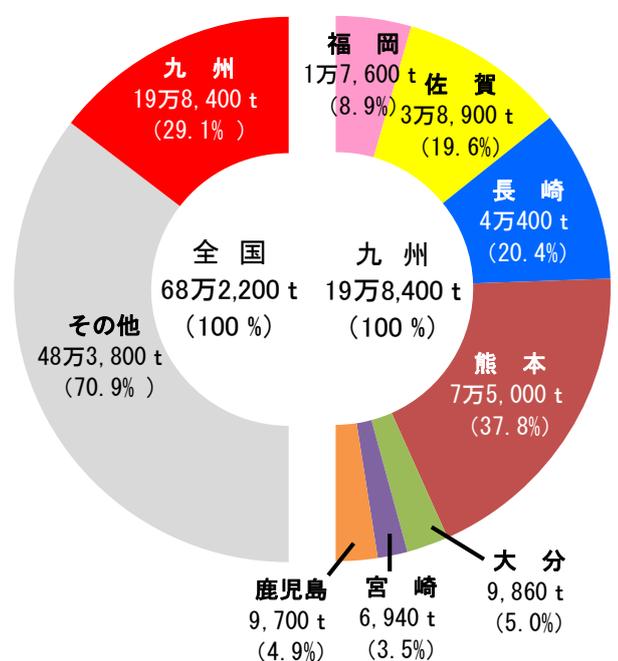
注：その他果樹は、その他のかんきつ類、くり、かき、日本なし、ぶどう、うめ、びわ、キウイフルーツ、すもも

みかん結果樹面積及び収穫量の推移(九州)



資料：農林水産省「果樹生産出荷統計」

令和4年産 みかん収穫量の全国及び九州内割合



資料：農林水産省「果樹生産出荷統計」

注：全国地域別は、農政局毎の割合を表示しています。

生産 — 花き —

【産出額は回復傾向、栽培面積は漸減傾向】

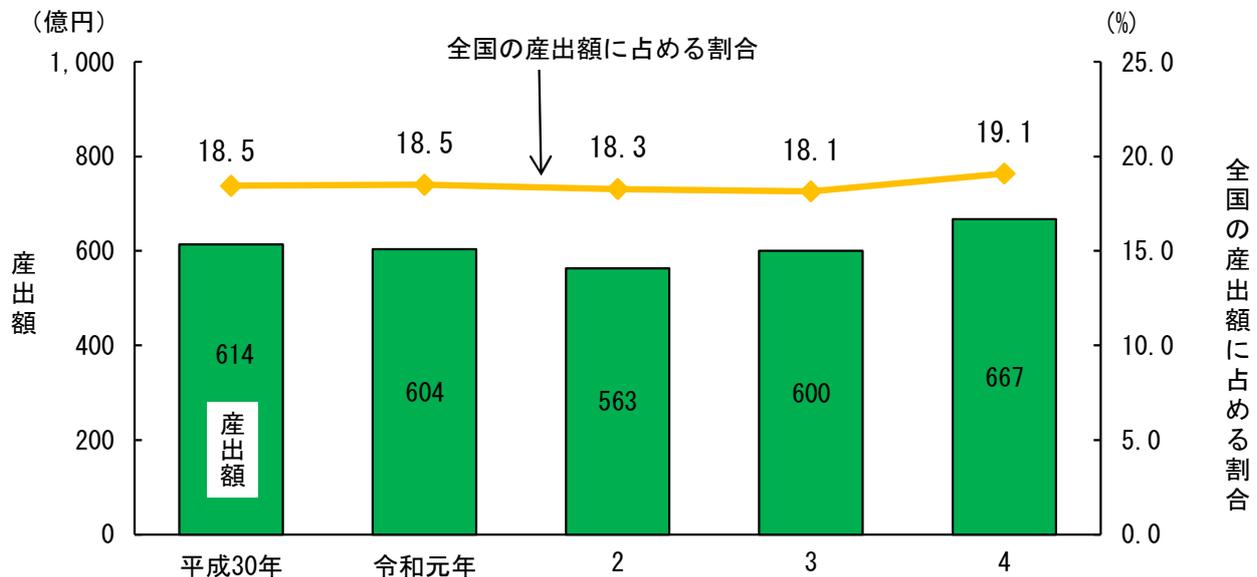
九州における令和4(2022)年の花きの産出額は、全国の19.1%を占める667億円で、前年に比べ産出額が回復しました。これは、新型コロナウイルス感染症対策の緩和によるイベント需要が高まったこと等が影響したものと考えられます。

一方、令和4(2022)年産切り花の作付面積は2,290haで、前年に比べ50ha(2.1%)減少しています。生産者の高齢化による作付面積の減少が続いていることを背景に、近年漸減傾向で推移しています。

出荷量は6億1,860万本で、前年に比べ3,390万本(5.2%)減少しているものの、そのシェアは全国の19.7%を占めています。

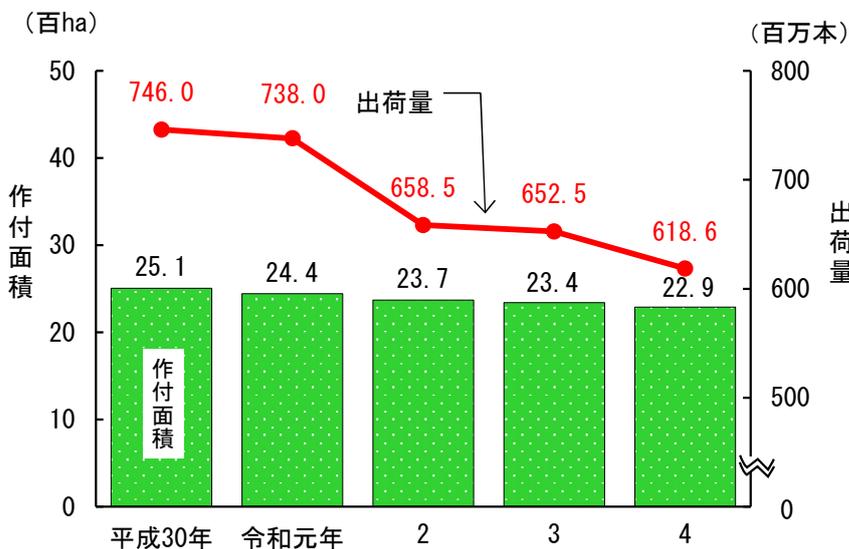
県別の出荷量をみると、洋ランやガーベラ等の生産が盛んな福岡県、きくやゆり等の生産が盛んな鹿児島県の両県で九州の44.4%を占めています。

九州における花きの産出額及び全国に占める割合の推移



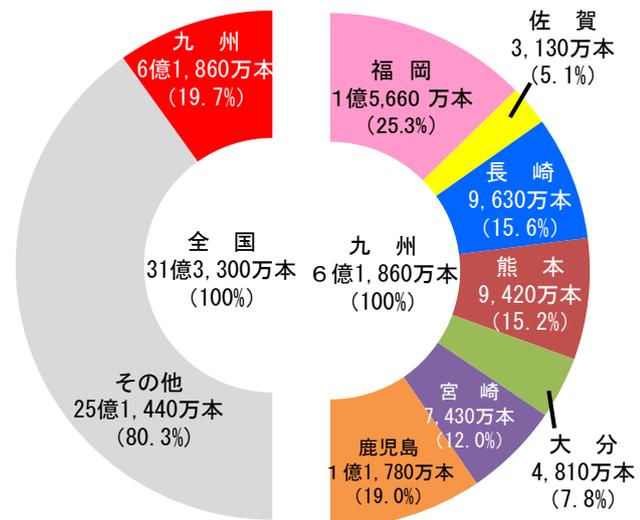
資料：農林水産省「生産農業所得統計」

花き(切り花類)作付面積及び出荷量の推移(九州)



資料：農林水産省「花き生産出荷統計」

令和4(2022)年産花き(切り花類)出荷量の全国及び九州内割合



生産 — 地域特産作物 —

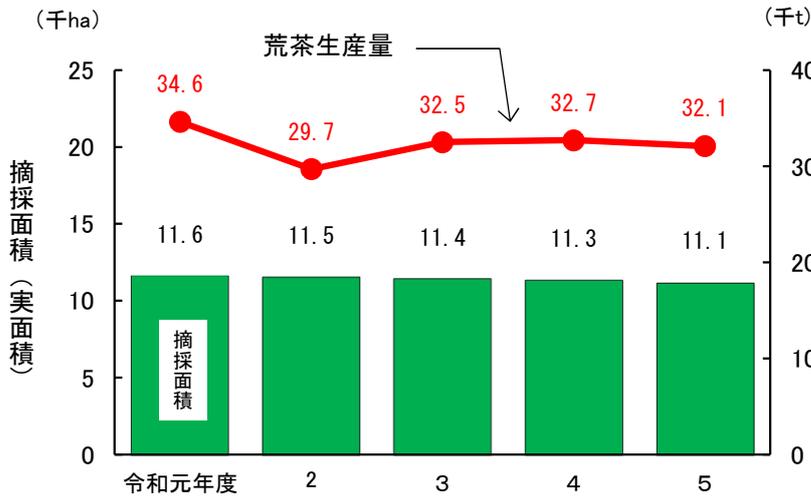
【茶：九州（主産県）の荒茶生産量は、全国（主産県）の約5割を占める】

九州（主産県*）の令和5（2023）年産茶の摘採面積は1万1,100haで前年産並みとなっており、荒茶生産量も3万2,100tで前年産並みとなっています。

九州（主産県）の荒茶生産量は全国（主産県）の47.2%を占めており、その中でも鹿児島県は、九州全体の8割以上を占めるなど、全国第2位の産地が形成されています。その他、宮崎県、福岡県でも、煎茶やかぶせ茶等の生産、加工が盛んです。

* 九州（主産県）は、福岡、熊本、宮崎、鹿児島の合計値

茶摘採面積及び荒茶生産量の推移（九州（主産県））

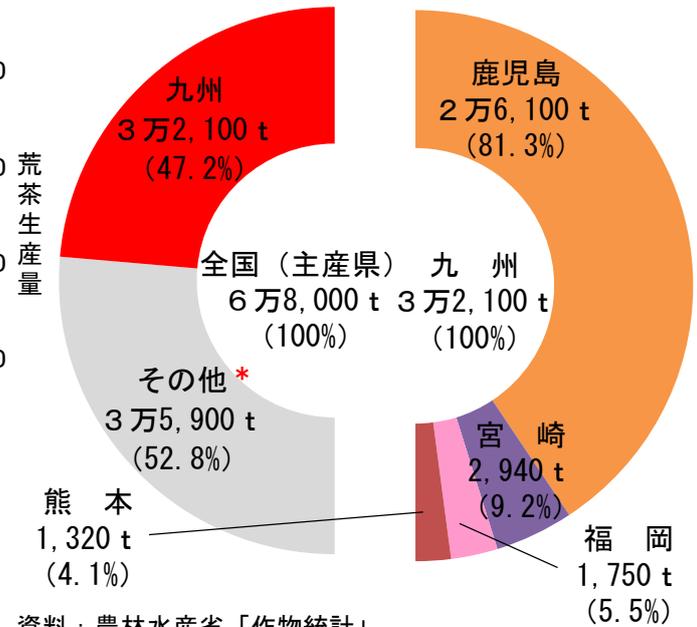


資料：農林水産省「作物統計」

注1：四捨五入（5桁（10,000）の場合下2桁、4桁（1,000）の場合下1桁）により合計値と内訳の計が一致しない。

注2：令和3年産からは概数値を使用。

令和5（2023）年産
荒茶生産量の全国（主産県）及び九州内割合



資料：農林水産省「作物統計」

* その他は、静岡、三重、京都、埼玉の合計値

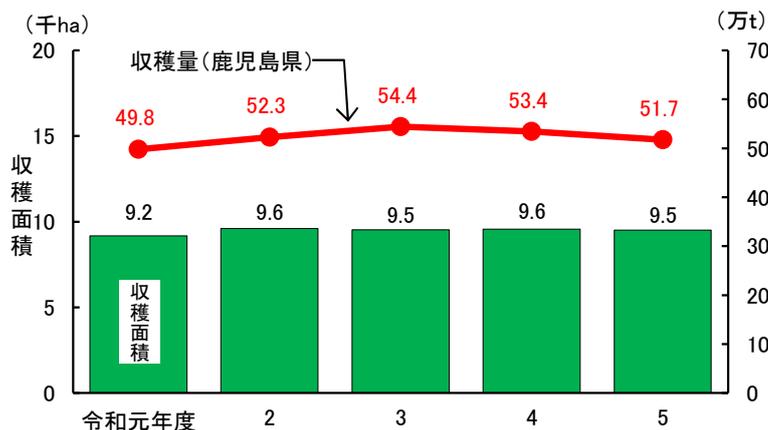
【さとうきび：鹿児島県南西諸島の基幹的作物】

さとうきびは、鹿児島県南西諸島及び沖縄県の基幹作物として栽培されています。

近年、鹿児島県のさとうきび収穫面積は横ばい傾向で推移しており、令和5（2023）年産の収穫面積は9,510haとなっています。

一方、収穫量は年間を通して少雨だったことにより生育が抑制されたことから、前年産に比べてやや減少し、51万7,300tとなっています。

さとうきび収穫面積及び収穫量の推移（鹿児島県）

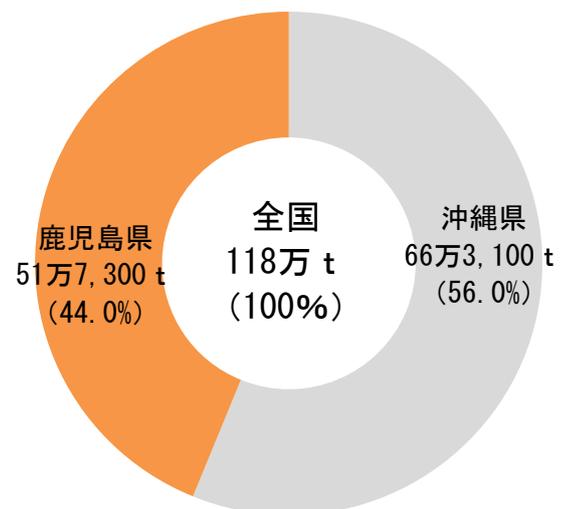


資料：農林水産省「作物統計」

注：令和5年産は概数値である。（8月に確定予定）

四捨五入（7桁（1,000,000）の場合下3桁）により合計値と内訳の計が一致しない。

収穫量の全国シェア（令和5（2023）年）



資料：農林水産省「作物統計」

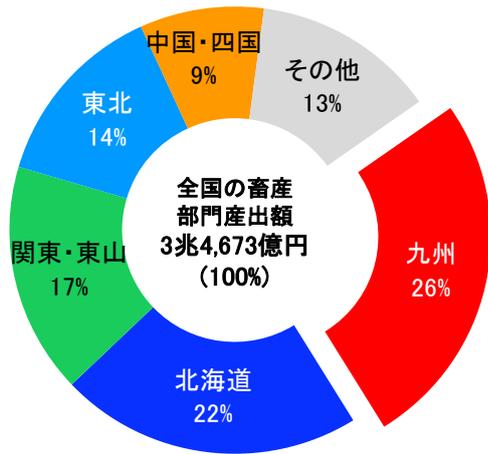
生産 — 畜産 —

【日本最大の畜産地帯】

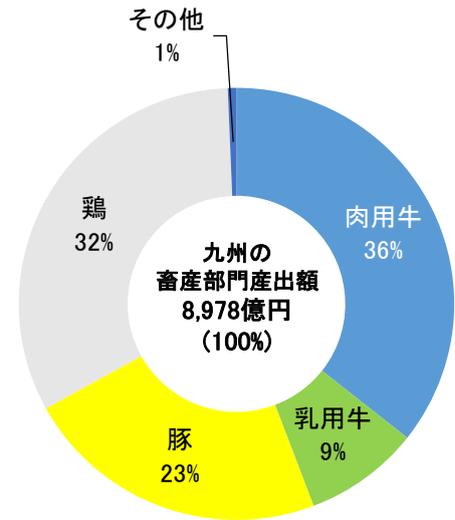
九州の畜産部門の農業産出額は、全国の約26%を占めており、畜種別では、高い順に肉用牛、鶏(鶏卵及びブロイラー)、豚、乳用牛となっています。

また、九州は、肉用牛、豚及びブロイラーの畜種別農業産出額の割合は、それぞれ全国の約4割、約3割、約5割を占め、農業地域別で全国1位の生産地域であり、我が国最大の食肉供給基地となっています。

農業産出額の畜産部門の全国割合
(令和4(2022)年)



九州の畜産部門産出額の畜種別割合
(令和4(2022)年)



畜種別

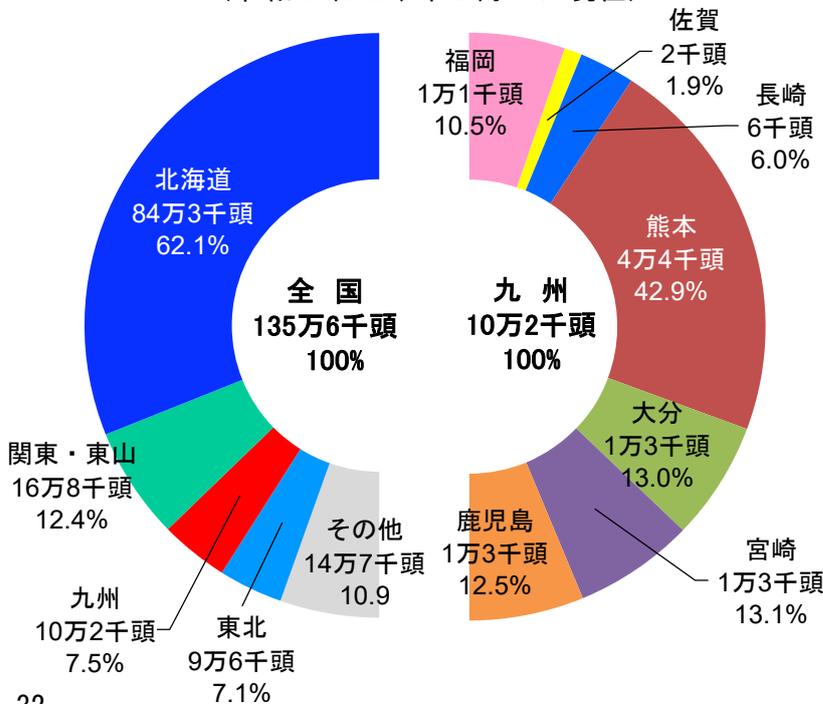
資料:農林水産省「生産農業所得統計」

注: 数値及び割合については表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります(以下同じ)。

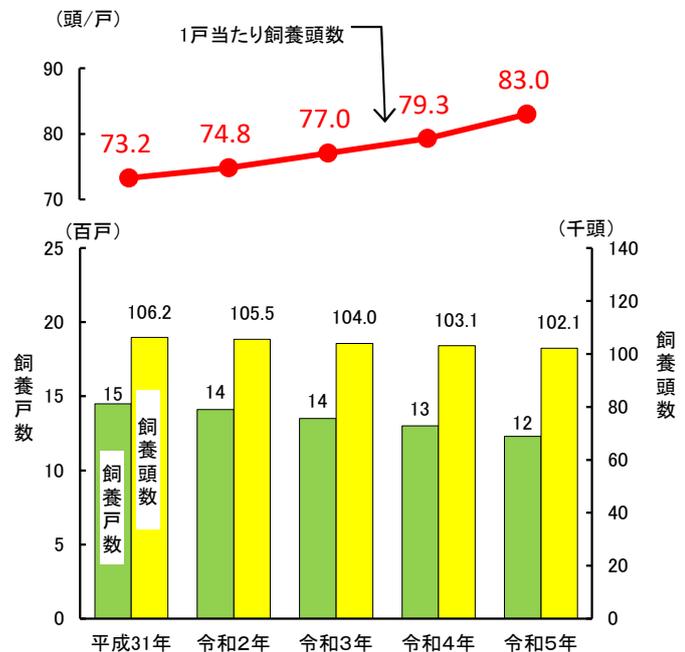
【乳用牛】

乳用牛の飼養頭数は近年減少傾向で推移しており、令和5(2023)年は前年に比べ、1,000頭減少し10万2,100頭となりました。県別の飼養頭数では熊本県が全国3位となっています。

飼養頭数の全国及び九州内割合
(令和5(2023)年2月1日現在)



飼養戸数、飼養頭数の推移(九州)

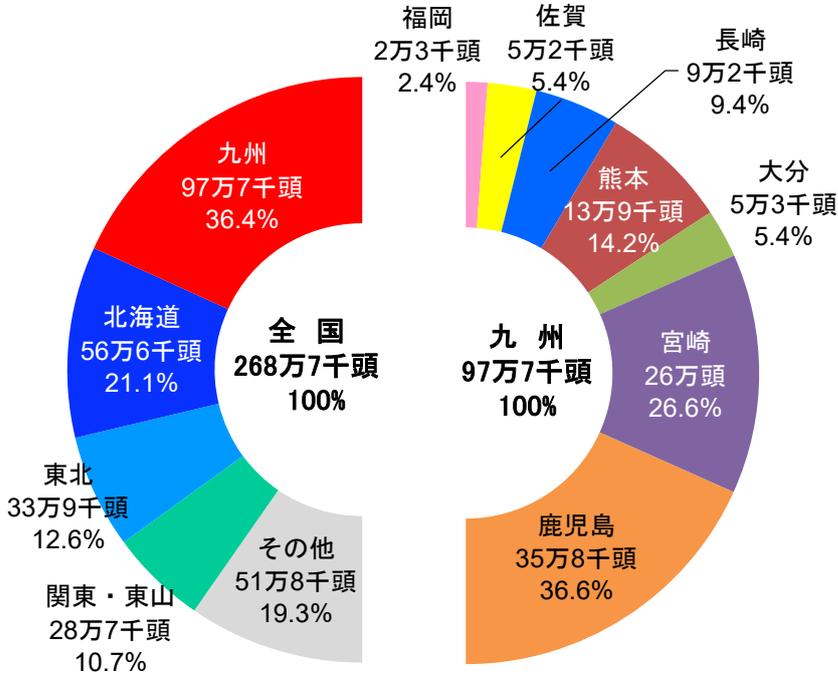


資料:農林水産省「畜産統計」

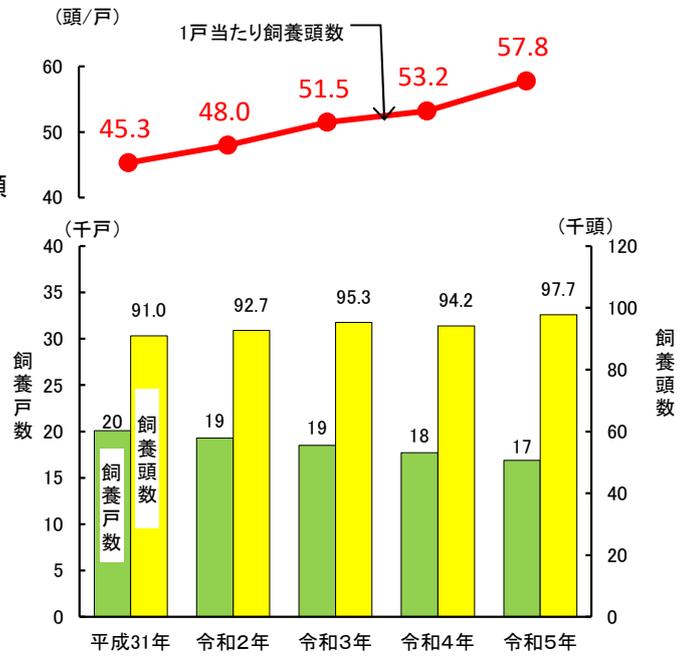
【肉用牛】

肉用牛の飼養頭数は、各般の生産基盤強化対策の実施により、平成29(2017)年から令和3(2021)年まで5年連続で増加し、令和5(2023)年についても前年に比べ3万5,700頭増加し97万7,400頭となりました。九州は全国の飼養頭数の3分の1強を占めており、県別の飼養頭数では鹿児島県が全国2位、宮崎県が同3位、熊本県が同4位、長崎県が同5位となっています。

飼養頭数の全国及び九州内割合
(令和5(2023)年2月1日現在)



飼養戸数、飼養頭数の推移 (九州)

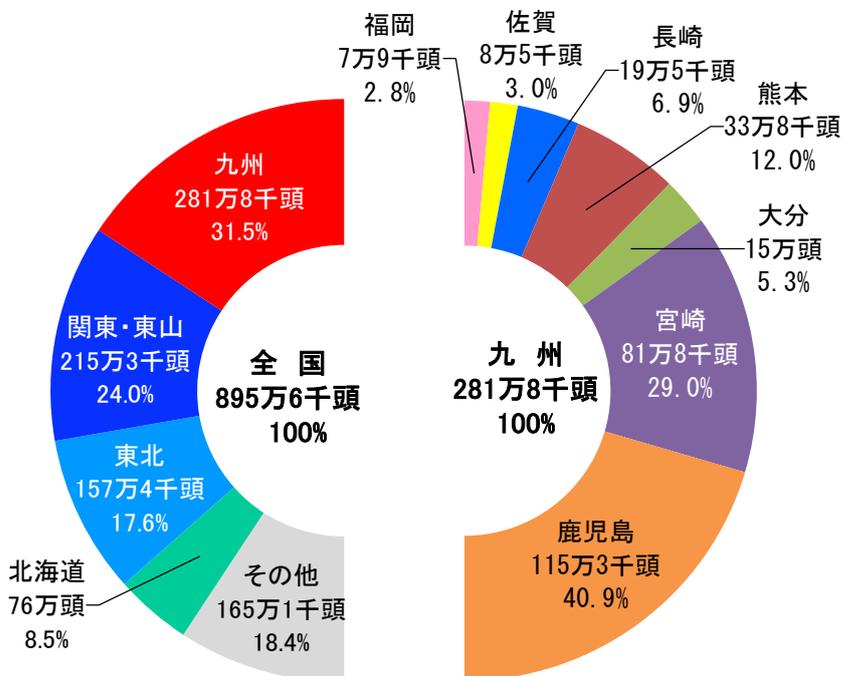


資料：農林水産省「畜産統計」

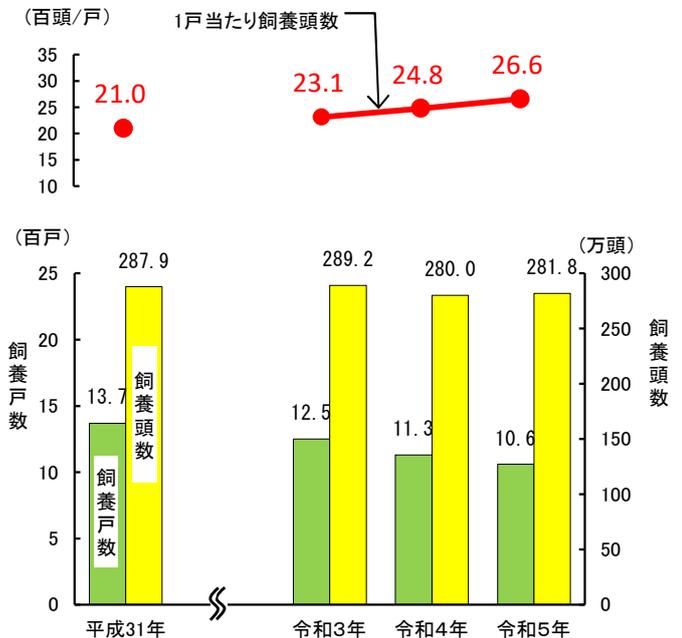
【豚】

飼養頭数は微増傾向で推移しています。令和5(2023)年は前年に比べ1万8,000頭増加し281万8,000頭となりました。県別の飼養頭数では鹿児島県が全国1位、宮崎県が同2位となっています。

飼養頭数の全国及び九州内割合
(令和5年(2023)年2月1日現在)



飼養戸数、飼養頭数の推移 (九州)



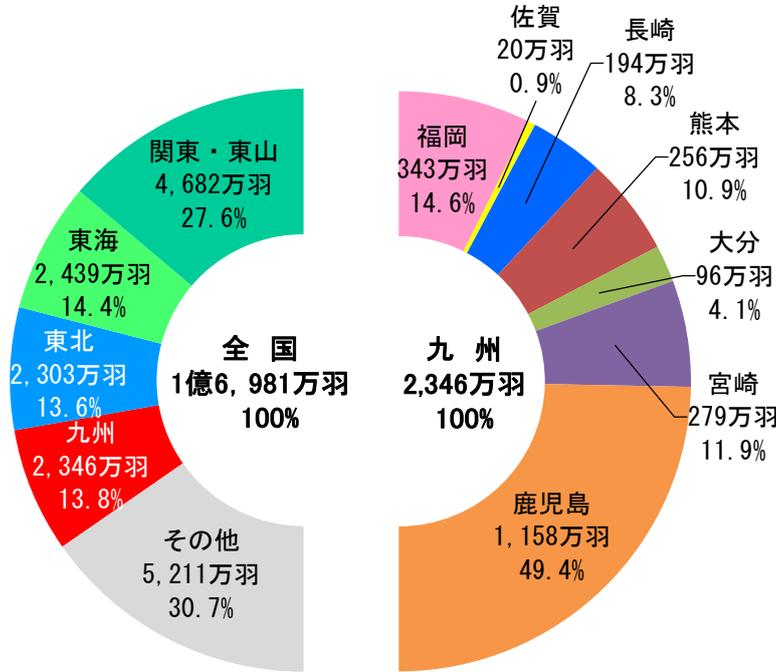
注：令和2(2020)年は、農林業センサス実施年のため「豚」の調査休止。

資料：農林水産省「畜産統計」

【採卵鶏】

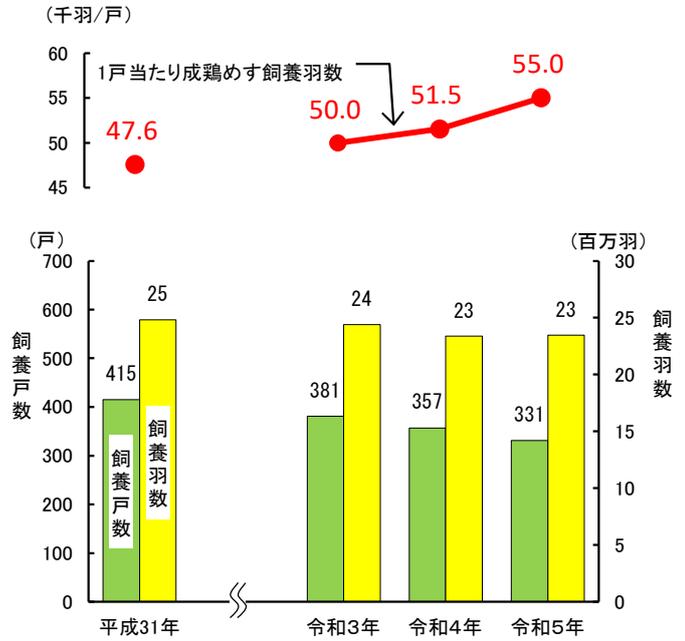
近年の飼養羽数は、ほぼ横ばいで推移しており、令和5(2023)年は前年に比べ91,000羽増加し2,345万9,000羽となりました。県別の飼養羽数では鹿児島県が全国3位となっています。

飼養羽数の全国及び九州内割合
(令和5年(2023)年2月1日現在)



資料：農林水産省「畜産統計」

飼養戸数、飼養羽数の推移(九州)

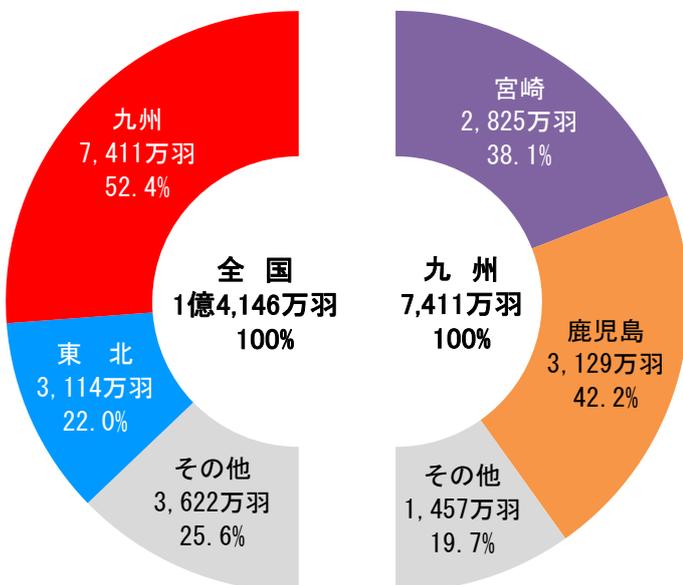


注：令和2(2020)年は、農林業センサス実施年のため「採卵鶏」の調査休止。

【ブロイラー】

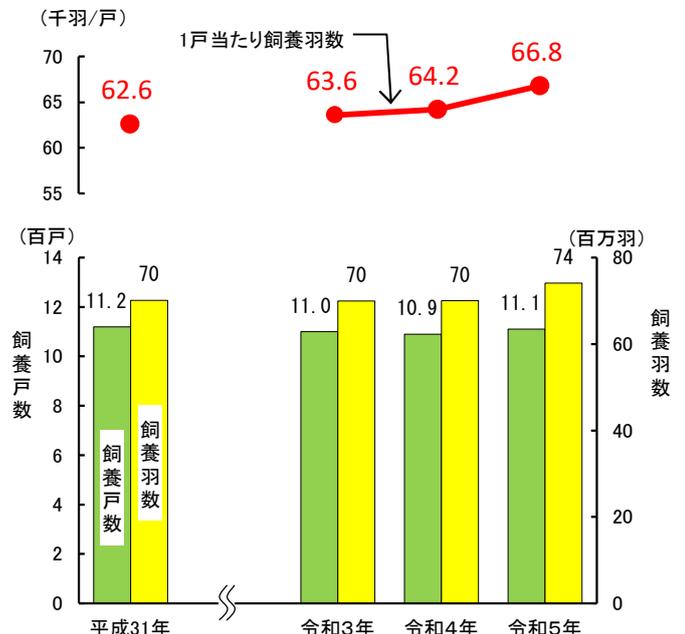
近年の飼養羽数は、ほぼ横ばいで推移していましたが、令和5(2023)年は前年に比べ408万7,000羽増加し7,411万羽となりました。県別の飼養羽数では、鹿児島県が全国1位、宮崎県が同2位となっています。

飼養羽数の全国及び九州内割合
(令和5年(2023)年2月1日現在)



資料：農林水産省「畜産統計」

飼養戸数、飼養羽数の推移(九州)



注：令和2(2020)年は、農林業センサス実施年のため「ブロイラー」の調査休止。